

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381187

研究課題名(和文) 教科学習に対する若手教員の授業力向上に資する基礎的研究～実技教科を中心に

研究課題名(英文) A Fundamental Study which Contributes to the Improvement of Teaching Abilities of Younger Teachers for Subject Learning ~Focusing on Practical Subjects

研究代表者

隅 敦 (sumi, atsushi)

富山大学・人間発達科学部・教授

研究者番号：30515929

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：若手小学校教員は、1年次は、教師用指導書の不備や示範授業の機会欠如など、初任者研修で十分研修の機会が得られないにも関わらず、2年次、3年次と他教科の授業を充実させる中で、実技教科における発話の質を向上させていた。特に子供の活動を見て行う「活動賞賛」、「活動奨励」、「活動承認」、「活動不安受容」の4カテゴリーに分類できる「同意」の発話が増加し、中でも、「活動不安受容」は、子供の実態に合わせた「発話」が可能になると増加している。したがって、「教員養成教育の段階」で、発話の大切さをきちんと身につけていくことができれば、現場に出て早い段階で子供ときちんと関わる指導ができるようになるのではないかと。

研究成果の概要(英文)：Younger teachers in elementary school, despite the fact that they have insufficient opportunities to be trained in the beginning teachers' training due to insufficient manuals for teachers and lack of opportunity for demonstration classes in the first year, have improved the qualities of their speeches in practical subjects. They have improved the speeches especially of "agreement" which can be categorized into 4 categories of "activity admiration", "activity encouragement", "activity approval", and "activity anxiety acceptance" conducted according to the activities of children, and in particular, "activity anxiety acceptance" has improved as the "speech" according to the reality of children became possible. Therefore if the teachers can recognize well the importance of speeches in the "phase of teacher training education", it will increase the possibility where they can give classes where they interact with children in school in an early phase.

研究分野：美術教育学

キーワード：教師教育 教員養成教育 実技教科 若手教員 発話

### 1. 研究開始当初の背景

団塊の世代の教員が大量退職し現在全国で教員の大量採用が行われ若手教員が増え続けている。そうした中で若手教員を研究対象として取り上げた先行研究(上野澄子2010)は、増加傾向にある。そこでは、主として学級経営や生徒指導などの勤務上の問題や校内研修全般における指導力形成に重点を置いた内容が中心であり、教科指導に特化した内容についても、国語や算数などの“主要教科”を取り上げた研究が中心である。しかし、“実技教科”と呼ばれる音楽科、図画工作科、家庭科、体育科等の教科は子供たちの好きな教科として、“主要教科”を凌いでいるという調査結果(ベネッセ教育総合研究所2008)もある。そこで、実技教科の指導力を向上させ子供の学びの質の向上に資する基礎的な研究を行うことにより、初任から若手に至る教員が悩む学級作りや生活指導上の課題を克服していくための契機にもなり得ると考えた。

### 2. 研究の目的

小学校の若手教員が初任の段階から教科教育の指導力を形成し子供の学びの質を向上させて行く過程を特に実技教科の授業の指導力形成の過程に視点を当て、その実態を調査して課題を検討する基礎的な研究を行うことにある。

### 3. 研究の方法

#### (1) 若手教員の授業記録

本学部の卒業生が在籍する調査対象校で、実技教科の授業記録を1年次に1授業を2年次、3年次に2授業ずつビデオ撮影し記録していく。そこでは、若手教員が指導する実技教科の授業を、教師を手持ちビデオカメラで、児童の様子を固定カメラビデオカメラで撮影した。その後教師と児童の談話記録をテキスト化した。

次に、談話記録を元に授業構成のバランスを導き出し、談話記録を元に「指示」「示範」「提示」「同意」「質問」「注意」のカテゴリーに分類して教員の指導した内容が、定着しているか否かを確認した。特に展開部における「同意」をさらに「活動賞賛」「活動奨励」「活動奨励」の4カテゴリーに分類し、3年間における若手教員の発話の質的变化を確認した。

#### (2) 聞き取り調査

学級経営の中で授業を行う問題点などについて聞き取り録音記録した。テキスト化したデータを単語や句の頻出度数やそれらの関係を統計的に解析しながら情報を抽出する分析を、テキストマイニングソフトを用いて行った。特に、抽出したキーワード間の意味関係を把握するために、ポジティブ、ネガティブの感性用語を抽出できる「感性分析」を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 若手教員の授業記録動画から分析した発話の質的变化

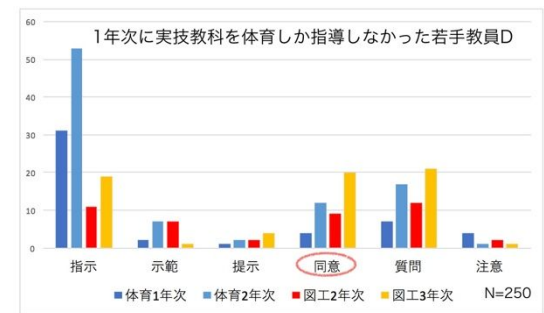
##### 若手教員の授業構成の変化

授業若手教員の授業時間全体に対する導入・展開・終末の時間数を出し、45分の授業が基本だが、授業開始のあいさつから、終了の礼までの時間を算出すると長短があることから実際にかかった時間を100%にして導入・展開・終末の割合を算出した。

その結果、1年次は、おしなべて授業構成のバランスが悪いという特徴が見られた。特に2名の若手教員は、導入部の時間が長く展開部において「指示」に分類される発話が多く、必然的に子供の活動時間が短くなっていた。2年次以降は、概ねアンバランスな授業構成の問題が改善され、展開の時間が確保されるようになっていた。

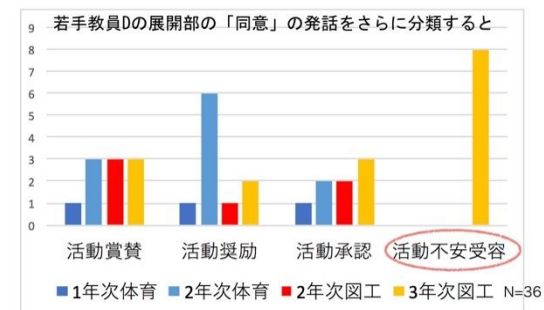
##### 若手教員の発話の質的变化

若手教員の授業中における発話の回数とその内容について、1年次から2年次3年次へとその変化を分析したところ、いずれも、授業における展開部の「同意」の割合が増加して、その内容が充実してきたことが分かった。



ここで、初任者研修の都合で、1年次に実技教科を体育しか指導しなかった若手教員を取り上げて、3年間の変容をまとめると、対象若手教員は、2年次の体育では、「同意」の出現率が8.2%から12%に増加している。

その内容は、1年次のボール遊びの単元の展開部の「同意」に分類した発話では、「活動賞賛」「活動承認」「活動奨励」の3回のみであった。2年次のマット運動の単元の展開部の「同意」に分類した発話の全体数が11に増え、内訳は「活動賞賛」が3回、「活動奨励」が6回、「活動承認」が2回となっている。次に2年次の図画工作の題材と、3



年次の題材の授業を比較すると、展開部の「同意」の出現率は21%から30%に増えて

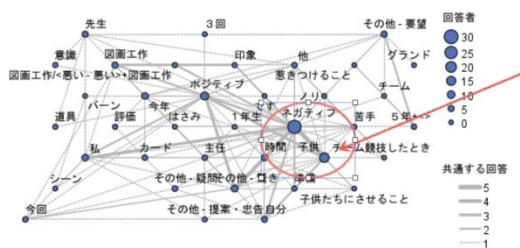
いおり、回数も6回から16回に増加している。また、特に「活動不安受容」として分類される発話が出現しており、子供が自分の活動に不安を感じて迷っている場面に対応することができるようになってきている。この事実について、若手教員自身は自覚しておらず、他の教員からも特に指導を受けているわけではない。授業における発話のみを取り上げると、1年次に指導していない実技教科があっても、他の実技教科以外を含む教科を指導する間に、子供の実態に合わせた発話が可能になっていることが推測される。

### (2) 若手教員の聞き取り調査から

対象教員全員の聞き取りデータをまとめてテキストマイニングで「感性分析」を行った結果、「実技教科の問題点」に関する質問では、1年次では、ネガティブに判断される表現の割合は20.8%である。特にどの若手教員も指導している体育に関しては、教師用の指導書な配備されていない実態や、先輩教員に授業を見せてもらう機会が少ないことが問題点として述べられている。

2年次も、ネガティブに判断される表現は19.1%、3年次は24.1%で特に変化がない。反対にポジティブに判断される表現の割合は、1年次は6.4%、2年次は11.6%、3年次は9.5%である。

授業ビデオ記録によると、若手教員は子供に対する発話の質を向上させているにも関わらず、聞き取り調査においては、「子供」というキーワードがネガティブに分類される表現に多く見られた。例えば、次のような発話があった。「体育も、その評価のこともそうなんですが、やって、なかなか動けない子供、苦手と思ってない子供、どうやって他の子供とチーム競技したときに一緒になってやらせるかが、問題になってきます」、「今回、写真を元にしてやったりしたんですけど、自分も最初心配してた、予想してたのもあるんですけど、選ぶ写真がすごく大事なあとという話がされて、すごい教材研究というか、子供の発想構想の予測をしなければいけないなと思いました」。



3年次に「子供」のキーワードが多く出てきたということは、「子供」との関わりの大切にした指導に必要性を強く感じてきたと言える。1年次は指導の一方通行があり、子供の活動を十分に見ていない実態があったが、2年次以降、子供の活動を見て発話をするように変わってきている実態が把握できる。

また、発話のテキストを再読すると、2年次以降に初任者研修期間が終わって担当す

る実技教科の数が増えたことに対する不安や、本人がその教科の実技能力に対する自信をもっていないことが理由として挙げられている。しかし、何よりも授業に対する自身の目が厳しくなっていることも考えられる。ただし、2年次、3年次と経験を積むことで、実技教科の授業力向上に他教科で得た工夫を活かそうとしている実態を把握することができた。

中でも、若手教員がICT機器(デジタルカメラ、液晶モニタ、タブレット端末、授業デジタル教科書等)の活用を日常的に行い、特に実技教科における自身の指導力不足を補おうとしている実態が、明らかになった。学校でのWi-Fiの環境が整っていない場合は、自分のスマートフォンを直に液晶モニタにつないで、提示したり、タブレット端末が配備されていない場合も自分で購入して、使用している若手教員もいた。

### (3) 今後の課題

初任時に若手教員に対する実技教科全般の指導力を形成するための研修の機会が少なく、課題があったとしても、2年次3年次と勤務を継続させる中で、他の教科の手法を取り入れたり、授業環境整備、授業構成、発問等の工夫を行ったりして、授業力を向上させていく姿を確認した。

若手教員の授業力向上に向けて、現時点では、発話の質の向上がその鍵の一つになっていることがおぼろげながらクローズアップされてきたところである。教員養成教育の段階で、授業における発話の重要性について講義の中でいかに取り上げるか、アクティブ・ラーニングの手法を含めて次年度以降新たな取り組みを始めたい。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計4件)

隅敦「教科学習に対する若手教員の授業力向上に資する基礎的研究～初任1年目の段階における実技教科指導の実際～」第37回美術科教育学会上越大会 2015年3月27日・28日, 上越教育大学

隅敦「教科学習の若手教員の授業力向上に資する基礎的研究～初任1年目の実技教科の授業分析を中心に～」第54回大学美術教育学会横浜大会, 2015年9月20日・21日・22日, 横浜国立大学

隅敦「教科学習に対する若手教員の授業力向上に資する基礎的研究～初任2年目の段階における実技教科指導の実際～」第38回美術科教育学会大阪大会, 2016年3月19日・20日, 大阪成蹊大学

隅敦・安江有沙「若手教員としての実技教科の授業力向上のための方途の提案 - 授業力向上に求められる教師の“発話”に着目

して - 」2016 年度美術科教育学会リサーチフォーラム in 京都,2017 年 1 月 7 日,京都テルサ

隅敦「若手教員の図画工作科授業力の向上を支えるために」第 39 回美術科教育学会静岡大会,2017 年 3 月 28 日・29 日,静岡県コンベンションアーツセンター/グランシップ

〔図書〕(計 1 件)

隅敦・安江有沙・竹内晋平・長友紀子・藤井康子・山口喜雄・三根和浪「2016 年度美術科教育学会リサーチフォーラム in 京都美術科教育における〈学習者×教師〉-質の高い授業構築をめざして-記録集」,2017,総ページ数 56

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

隅敦 (SUMI, Atsushi)

富山大学・人間発達科学部・教授

研究者番号：3 0 5 1 5 9 2 9

### (2) 研究分担者

三根和浪 (MINE, Kazunami)

広島大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：8 0 2 9 4 4 9 5

### (3) 連携研究者

竹内晋平 (TAKEUCHI, Shimpei)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：1 0 5 5 2 8 0 4